

退職にあたり

筑波大学理療科教員養成施設長（第11代）

緒方 昭広

この3月退職を迎えることとなり、筑波大学の関係者の皆様すべての方々に、ただただ心より感謝を申し上げる次第です。

2018年4月に人間系教授と理療科教員養成施設の施設長として、迎えていただきましたが、微力のあまり到底大過なく順風満帆とは言えない仕事ぶりであったと反省し、自戒するとともに歴代施設長の写真を見ながらお詫びしております。

また、本施設教職員をはじめ、理療科にかかわっていただいた本学教職員のすべての皆様の、理療科に対するご支援、熱いご指導を賜り衷心より深く感謝申し上げます。

皆様も同様ですが、在任後半2年間は、新型コロナ感染に始まり、パンデミックに世界の人々の日常や社会生活が一変しました。残念ながらこの原稿を書いている間も、オミクロン株感染に世界のリーダーや国民がうんざりするほどの感染者に毎日溜息をつき、いつになれば感染が沈静するのか、コロナ前に戻れるのかななどの将来への不安を心に抱いておられる状況があります。

しかし、先の見通しが立たない状況ではありますが、これからの感染への心の持ちようは、with coronaをほぼインフルエンザと同等の受け止め方で、自分を守りながら少しでも明るい将来を作るために、生活していくことが肝要と思うのは、私以外にもおられることと思います。コロナ対応でもわかるように、一つの国あるいは数か国での対応ではもはやその沈静化を図ることはできないように、一つの国、あるいは一つの大学のみで多くの成功は望めないのではないのでしょうか。

これからさらなる共同、共創の時代が一層発展していく、いやそうならなければ社会の発展や人々が生き抜くことは不可能とっております。

一方理療科教員養成施設では、明治36年に東京盲啞学校に「教員練習科」として創立されて以来、近々120年という節目を迎えます。90名以上の非常勤の先生方にご講義をいただき、教員養成機関として理療科の教員養成を1世紀以上にわたり尽力してきました。学生は2年間で超過密の89単位を消化して、盲学校（特別支援学校）、厚労省管轄の援護施設（リハセンター）に赴任し、視覚障害者の「命をつなぐ理療教育」

に力を注ぎこんできました。これらの施設が存続する限り教員養成は必須です。彼らに指導を受けた視覚障害者が国家免許を獲得し、社会で自立していけるよう（命をつないでいく）手助けをしていることは、何物にも代えがたい貴重な尊い行為と自覚しています。

これまでの、そしてこれからの理療科教員の方々に対して、「視覚障害者の自立をよろしく願います」、そして「ありがとう」と40年の視覚障害教育に終止符を打つ一人として言わせていただきたいと思いません。

今までの私に直接、間接に公私にわたりご指導ご支援をいただいたすべての方々に、心より御礼を申し上げるとともに、皆様がこれからも、ご健康でより良き人生を送られて行かれることを、お祈りし筆をおきます。「ありがとうございました」（感謝）

令和3年12月1日